様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７　～２００９
課題番号：１９５３０５９１
研究課題名（和文）軽度発達障害児の友人関係形成スキル発達支援プログラム開発のための心理学的研究
研究課題名（英文）　A psychological study for developing friendship skills of children with mild developmental disabilities

研究代表者
遠矢　浩一　　（TOYA KOICHI）
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授
研究者番号：５０２４２４６７

研究成果の概要（和文）：自閉症やアスペルガー障害を主とする知的能力の高い発達障害児を対象とした集団心理療法を実施する中でそこに参加する児童および保護者を対象に友人関係意識についての調査研究を実施した。その結果、学校等の日常生活において友人関係トラブルに遭遇しやすい発達障害児自身は決して友人を欲していないわけではなく保護者の認識をも超えて、親しい友人を持つこと、友人の気持ちをわかることを希求していることが明らかとなった。そうした心理療法において必要なプログラム構成上の視点について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the process of group-psychotherapy for children with autism or asperger syndrome who have higher intellectual abilities, a survey to find out the features of children's conscience of friendship. As a result of this survey, children who meet many kinds of interpersonal troubles do not avoid the friendship but they deeply hoped to have good friend and to understand other's mind. Additionally, necessary viewpoint for setting the program of group-psychotherapy was discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：発達障害

１．研究開始当初の背景　2003 年３月の“今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）を受けて、通常の学校における軽度発達障害児の教育的支援体制の構築が急がれている。各都道府県の教育委員会を中心に、特別支援教育推進体制モデル事業における特別支援教育コーディネーター養成講座などを通じて、人材養成、校内体制の整備が推し

進められている。専門家レベルでも、小、中学校におけるコンサルテーションの在り方について、実践的な検討が進められている（関戸，2004；芦澤・浜谷，2004）。

最終報告の主要な特徴の一つが、障害をもつ児童・生徒を原則として通常の学級に措置し、それぞれの子どものニーズに合わせて、特別支援教室において個別的支援を行おうとしていることにある。発達障害児が学校生活の多くの時間を通常の学級で過ごすことを意味しており、学級担任に課せられる教育上の責務が必然的に増大することを意味する。2004 年 12 月に成立した発達障害者支援法においても、「発達障害児の健全な発達が他の児童と共に生活することを通じて図られるよう適切な配慮をするものとする」とするなど、発達障害児が通常の環境で、十分な教育や保育を受けられるよう適切な支援をする必要があるとの立場を明確にしている。

このように、発達障害児が「他の児童と共に」学校生活を快適に送っていくためには、学校の教育システムや教師の指導態度といった環境調整的な側面に併せて、発達障害児自身が他者に対して、社会的に適切な形で自己をコントロールし、集団生活へ適応していくことも必要となる。そうした社会的・集団適応のために必須となる能力が、他者の意図や感情を適切に認知し、そうした認知にあわせて自己の対人行動をコントロールする社会的スキルといわれるものである。

自閉症児の Theory of Mind に関する一連の研究（Baron-Cohen, Leslie, and Frith、1985 他）において、自閉症児が他者の信念や心の状態についての理解に困難を示すことが明らかになった。一方では、自閉症や AD/HD においては、先を見通した行動のプランを行うことができず、現在、目に見える対象に衝動的に反応してしまうといった実行機能障害を有していることが指摘されるようにもなった（Hughes and Russell,1993）。発達障害児が他者の行動に突発的に反応し、衝動的な行動を行ってしまうのはそうした実行機能の障害があるからであるとされる。

こうした発達障害の中核的障害に関する理論的検討が様々に行われてきているが、軽度発達障害と言われるこどもたちが、対人関係において様々なトラブルや葛藤場面におかれる際に、他者の意図や感情を「どのように認知しているのか」については必ずしも明らかにされていない。さらには、そうした発達障害児の対人認知の特徴を考慮した、友人関係を主とする対人関係形成スキルの発達支援プログラムの検討は未だ、十分に行われていない。

２．研究の目的

(1) 発達障害児の友人関係認識のあり方に関する研究

本研究では発達障害児の友人関係認知パターンの検討を行い、発達障害児の対人関係形成スキル発達支援の手がかりを得る。特に、発達障害児が現在の友人関係のあり方をどのように認識し、将来、どのようにそれを変容させていきたいと捉えているのかという前方視的視点から、発達障害児の友人関係認識の様相について明らかにする。

（２）発達障害児の友人関係認識と保護者のとらえ方の関係性に関する検討

保護者の子どもに対する行動全般に対する評価のありようと、こども自身の友人関係認識のあり方との関係性を見ることを通して、保護者からみたどのような行動特徴が、友人関係認識の困難やこども自身の不全感と繋がっているのかについて明らかにする。

３．研究の方法

筆者の所属機関で研究期間中に継続的に実施した集団心理療法参加児童と保護者を対象に作成された友人関係尺度（34 項目、SD 法　6 段階評定）および、保護者が各年度に評価したCBCLの得点さらにWISC-Ⅲの各種得点をもとに分析を実施した。対象児および保護者のいずれも、現在の友人関係に関する認識と、将来、期待している友人関係のあり方の両方について評価した。

４．研究成果

(1) 因子分析　こどもの友人関係に関する現状認識について因子分析(重み付けのない最小2乗法．プロマックス回転)を行った。その結果、３つの因子が抽出され、第一因子は『相互理解』(α=.91)、第二因子は『共同活動』(α=.92)、第三因子は『会話』(α=.89)とした。

(2) 子どもの友人関係に関する理想認識の性差

現状認識に関して得られた3因子構造を用いて、「性(2)×3因子 (3)」の二要因分散分析を行った(図2)

その結果、性別の主効果は有意でなかった。因子の主効果が有意であり（p<.01）であり、Ryan法による多重比較の結果、相互理解＞共同活動＞会話の順で得点が有意に高かった。相互理解－会話間（p<.01)）、相互理解－共同活動間(p<.05)、共同活動－会話間(p<.01)）で得点の有意差が認められた。

さらに、交互作用が有意であった(p<.05)。単純主効果の検定の結果、男児、女児のいずれにおいても因子間の有意差が認められた。Ryan法による多重比較の結果、男児において「会話」よりも「相互理解」（P<.05)が、また「会話」よりも「共同活動」(P<.05)が有意に高かった。女児において「共同活動」よりも「相互理解」（p<.01)が、「会話」よりも「相互理解」(P<01)が有意に高かった。「会話」より「共同活動」が有意に高い傾向も認められた(p<.10)

(3) 現状認識についての親子間差

全34項目に対する子どもの現状認識得点と保護者の現状認識得点についてt検定を行った。その結果、有意差は見られなかった。そこで、各質問項目ごとに、子どもと母親の現状認識得点の比較をｔ検定を用いて行った。その結果、「友だちの考えていることにも気をつかい、相手を傷つけないようにする」p<.01)、「心から友だちを親友と思う」(p<.01)、「友だちを信じ、頼りにしている」(p<.01)、等の項目において、子どもの現実得点が保護者の現実得点よりも有意に高かった。

(4) 理想認識についての親子間差

理想認識得点については、親子間に有意差は認められなかった。

(5) CBCL得点とこどもの友人関係認識得点の関係性

母親から見た子どもの問題行動に関する評価傾向と、子ども自身の友人関係に関する理想・現状認識の関係性について検討することを通して、母親からみるどのような問題行動傾向が、こどもの友人関係についての認識のあり方と関係するのかを評価することとした。

分析に当たっては、まず、CBCLにおける各問題行動カテゴリー得点の96パーセンタイルを境に、各問題行動のリスク高群、低群に子どもを群分けした。次に、現状認識に関する3因子の因子得点、WISC-ⅢのVIQ, PIQ,FIQ, 言語理解以下４つの群指数、子どもの理想認識と現状認識の差異（理想認識得点－現状認識得点の値。以下、差異得点と記載する）について、リスク高群－低群間においてt検定を行った。　t検定の結果、以下が明らかとなった。

「引きこもり」については、両群間に現状認識3因子およびWISC-Ⅲの各下位得点の有意差は見られなかった。一方、差異得点については、「友だちといっしょに学校に行ったり、学校から帰ったりする(p<.01）」、「友だちと、アニメやお笑いなどのテレビ番組の話をする(P<.05)」、「友だちと、給食やお弁当

をいっしょに食べる(p<.05)」といずれも、リスク高群がリスク低群よりも大きかった。すなわち、引きこもり傾向の強い子ども達が、現状よりも頻繁にこうした友人との関わりを持つことを期待していることを示している。

不安・抑うつについては、両群間に現状認識3因子およびWISC-Ⅲの各下位得点の有意差は見られなかった。一方、差異得点については、「友だちが、自分のことをよくわかってくれている(P<.10)」においてリスク高群が、リスク低群よりも低いだけでなく、リスク高群は理想認識得点の方が現状認識得点よりむしろ小さかった。すなわち、不安・抑うつ傾向の高い子どもたちは、友人関係に関する将来展望が極めて悲観的であることを示している。

社会性の問題については、WISC-Ⅲの各得点の有意差は見られなかった。現実第一因子「相互理解」において、リスク高群が低群よりも因子得点が低かった(P<.10)。すなわち、社会性の問題傾向を高く有すると見なされる子どもたちは、友人との相互理解を他児と比べて行えていないと認識していることがわかる。すなわち、友人関係の不全感を認識していながらも社会性の問題を引き起こしてしまうと言う葛藤状況にあると考えられる。一方、差異得点については、「友だちと将来とか、これから先のことについての話をする(p<.05)」、「友だちと約束したことは、破らないようにする（P<.10)」において、リスク高群が低群よりも大きかった。一方、「友だちと、自分が悩んでいることについての話をする(p<.01)」、において、リスク高群が低群より小さかった。将来展望に関する会話や約束事の遵守と言った現実的な事柄についての社会的関係性は期待しているものの、悩みについて相談しあうというようなより深い関係性を持つことについては、消極的であることが示唆される。

思考の問題については、両群間に現状認識3因子およびWISC-Ⅲの各下位得点の有意差は見られなかった。一方、差異得点については、「友だちと約束したことは、破らないようにする(p<.01)」、「友だちとけんかをしたり、友だちを怒らせたりしないように気をつける(P<.10)」、「友だちを信じ、頼りにしている(p<.05)」において、リスク高群の得点が低群より高かった。思考に関する問題を持つ児童であっても、友だちとの約束を守り、喧嘩をせず、お互いに信頼し合う友人関係を形成したいと強く望んでいることがわかる。

注意の問題については、WISC-Ⅲの各下位得点の有意差は見られなかった。現実第二因子「共同活動」において、リスク高群がリスク低群より因子得点が低かった（p<.05)。すなわち、注意の問題を有すると見なされるこどもたちは、自分が友だちと一緒に過ごす機会が少ないと自ら認識していることがわかる。一方、差異得点については「友だちと、アニメやお笑いなどのテレビ番組の話をする（P<.05）」、「一人で過ごすより、友だちといっしょに遊ぶ(p<.10)」、「友だちの考えていることにも気をつかい、相手を傷つけないようにする。(p<.10)」、「心から友だちを親友と思う(p<.10) 」において、リスク高群の得点が高く、友だちと将来、親しく配慮的な友人関係を保っていきたいと考えていることが示された。一方で、「友だちと、自分が悩んでいることについての話をする(p<.10)」については、リスク高群の差異得点の方が小さく、悩みなどのプライベートな内容について友人に語る事への強い不安を抱えていることがうかがわれた。

攻撃的行動については、WISC-Ⅲの各下位得点の有意差は見られなかった。現実第三因子「会話」において、リスク高群の因子得点が高かった（p<.10)。すなわち、攻撃的と見なされるこどもたちは、むしろ、友人との会話がスムーズに行われていると自己認知していることを示す。差異得点については、「友だちと、給食やお弁当をいっしょに食べる(p<.01)」、「一人で過ごすより、友だちといっし

ょに遊ぶ(p<.05)」、「自分のやりたいことを友だちにじゃまされずに遊べる(p<.10)」のいずれについても、リスク高群の得点が大きく、食事や遊びにおいて、友人と友好的に関わっていきたいという理想を描いていることが示された。

これらの結果から、一見、対人関係スキルが低く評価される発達障害児であっても、本人は友人関係を強く希求していること、さらに、保護者から行動的問題が認められるとされるこどもであって、内的には、強い友人関係欲求を持っていること、また、友人関係の不全感に関する強い葛藤を感じていることなどが明らかとなった。

発達障害児の支援に当たって、こうした内的対人関係葛藤を十分に考慮した支援が必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計 2 件）

①□神野陽介・豊丹生啓子・遠矢浩一・針塚進、対人的困難を示す児童への自己表現および相互需要を促す心理劇、第 35 回西日本心理劇学会、平成 22 年 2 月 27-28 日、鹿児島大学

②□村上広美・甲斐原知恵・遠矢浩一・針塚進、対人関係に難しさを持つ思春期女児グループへの心理劇　―グループの経過に応じた心理劇展開の工夫―、第 35 回西日本心理劇学会、平成 22 年 2 月 27-28 日、鹿児島大学

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

遠矢　浩一（TOYA KOICHI）

研究者番号：50242467

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：